

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：23901  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2009～2011  
 課題番号：21520801  
 研究課題名（和文） 歴史地区の環境価値の発見と地方都市の再生戦略—地中海の創造都市への注目—  
 研究課題名（英文） Environmental values of the historic center and regeneration strategy for provincial towns: focusing on Mediterranean creative cities  
 研究代表者  
 竹中克行（TAKENAKA KATSUYUKI）  
 愛知県立大学・外国語学部・教授  
 研究者番号：90305508

研究成果の概要（和文）：本研究は、都市の形成・発展の中心をなしてきた歴史地区の物理的・社会的衰退を前に、建造環境とそこに刻み込まれた人間活動の価値を発見し、都市の将来的発展に繋げるための方途について、地中海都市から学ぶことを目的とした。スペイン・カタルーニャ自治州の中規模都市、タラゴナとレウスの事例研究は、多くの市民の関与によって歴史文化遺産の価値を引き出すとともに、時を超えて都市の共有像を育みつづけることの重要性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Physical and social deterioration is a common problem of many historic centers, where the city was born and began growing. The objective of this research project consists in learning from Mediterranean cities how to recognize environmental values of the historic center with human traces left on it. The project also aims at turning those values to assets for the future city. A case study on two medium-sized cities of Catalonia, Tarragona and Reus, has highlighted the importance of valuing cultural heritage among citizens from different backgrounds, promoting as well a collective image of the city which should be inherited over time.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：都市地理学，創造都市

## 1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進む現代にあって、世界都市たりうる少数の巨大都市が繁栄を享受す

る一方、多くの地方都市が深刻な地盤沈下を経験している。近年の新自由主義的な経済産業政策が、首都と地方都市の格差を一層助長しているともいわれる。

問題の山積を前に、地理学では、商業機能が集積する中心市街地の再活性化、高齢化する日本のニュータウンの再生、地球規模の交流による成熟都市のまちづくりなど、多様な視点からの研究が蓄積されてきた。それらは、都市空間の内部に広がる格差やコミュニティの衰退といった現代の都市問題の特質を鋭く指摘している。

しかし、然るべき関心が向けられていない領域も少なくない。本研究が重視したのは歴史地区の環境価値、すなわち長い年月を通じて形成された建造環境とそこに刻み込まれた人間活動の蓄積がつくる都市の固有性である。そうした環境価値を現代人の視点からとらえなおし、住みやすくかつ人を惹きつける都市を構築するための方途はいかにあるべきか、地理学の古典的ともいえる問いに応えることが、改めて必要とされている。

文化経済学や文化政策学などの分野では、1990年代末から創造都市をめぐる議論が活発化してきた。地中海都市でいえば、文化・芸術を核とする価値創造に成功したポローニャやバルセロナが代表例とされる。しかし、多くの都市に適用可能な知見を導き出すという観点にたてば、むしろ、知名度は低くとも高い生活の質を実現している都市の戦略に光を当てることが重要と考えられる。

## 2. 研究の目的

上述の問題状況に照らして、本研究が注目したのは、地中海ヨーロッパの中規模都市である。それらの多くは、豊富な歴史文化遺産（以下、「遺産」と略す）を擁するのみならず、歴史地区の環境価値を再解釈することで、遺産の動態的な活用に繋げている。他方、歴史をわずか数十年遡ると、郊外中心の乱開発のもと、歴史地区が置き去りにされた過去に行き当たることも珍しくない。1970年代末に独裁体制から脱したスペインが典型である。こうした地中海都市の事例は、戦災・災害のたびに都市をつくり変えてきた日本にとって、復古的な歴史的街並みの保全を超えて、遺産を現代の都市再生にいかす方途を考えるうえで示唆に富むのではないか。さらに、自治州制の導入と市政の民主化を通じて、政権交代が都市政策に新しいアイデアを注入する回路として機能するようになったスペイン都市の経験は、国の施策に頼らないボトムアップ型の取り組みが必要といわれる日本の自治体行政に対しても、発想転換のためのヒントを与える可能性がある。

そこで、都市の中心をなす歴史地区の衰退を前に、その環境価値を発見し、都市全体の発展に繋げるための方途についてスペイン都市から学ぶことを、本研究の目的とした。中心事例としては、古代に遡る考古遺跡を擁

し、2000年にユネスコ世界遺産に登録されたタラゴナを選び、これを隣接都市レウスの事例で補った。バルセロナの南西100kmに位置するタラゴナは、13.8万人（2008年）の人口を有し、レウスとともにカタルーニャ自治州第2の都市圏をなしている。

## 3. 研究の方法

都市政策の制度的枠組みに関する研究、タラゴナの事例研究、レウスの事例研究を、およそ1年の時間差をおいて発展的に展開した。中核をなしたのは、毎年9月に実施した現地調査であり、これをオンライン・データベースによる地域計画・都市計画に関する資料蒐集で補完した。現地調査は、図書館・文書館における資料・データ蒐集、都市政策にかかわる主要アクターへのインタビュー調査、視認と聞き取りによる踏査的フィールドワークの3つを柱とした。なお、当初の計画では、最終の2012年度に、事例2都市の比較分析・総合を行う予定であったが、前年度申請した研究課題の採用にともない、本研究課題は2011年度をもって終了となった。このため、成果集約は、2012年度に始まる4年計画の新規研究課題のなかで行うこととした。

古代ローマの属州タラコの遺構に被さるよう現代の市街地が建設されたタラゴナでは、多数の考古遺跡の存在ゆえに、歴史地区が観光地として大きな潜在力をもつ。これに対して、蒸留酒や農産物加工品の取引中心地として発展したレウス歴史地区は、小規模店舗が軒を連ねる商業地区として知られる。

現地調査の内容は、こうした各対象都市の性格をふまえて決定した。中心対象たるタラゴナの調査では、郊外の乱開発から歴史地区への再評価を経て、遺産を保存・可視化にいたるプロセスの把握に力点をおいた。また、それら政策をめぐる各種主体の言説の蒐集を進めた。タラゴナとの対比を意識したレウスの調査では、生活者が日常を過ごす商業空間としての歴史地区の環境価値に照準を定めた。いずれの調査においても、関連分野の研究実績を有するルビラ・イ・ビルジリ大学（タラゴナ／レウス）のジュゼップ・ウリベラス教授から、情報提供や現地インフォーマントの紹介を受けた。また、タラゴナの考古遺跡の調査・公開をめぐる問題については、同大学のルイス・デ・アルブロ教授から多くの教示を得た。

## 4. 研究成果

本研究の成果は、地理学を中心とする関連学会で定期的に公表した。後掲「学会発表」の①④⑨⑫（いずれも人文地理学会での研究報告）が代表的な報告である。また、それら

を下敷として、タラゴナに関しては後掲「雑誌論文」の④⑥、レウスについては同②を論文として公表した。また、本研究を進める過程では、2004年に始まるカタルーニャ自治州の「地区プログラム」が重要政策として浮上したため、これに的を絞って同①を上梓した。以下、各々の具体的内容にふれながら、研究成果を要約する。

### (1) タラゴナ

タラゴナでは、古代タラコ中枢部が遺跡化した上に中世の都市が再建され、現在のタラゴナ歴史地区（上手地区）に受け継がれている。このため、市街地の地下に横たわり、しばしば建造物の基礎部分に取り込まれている考古遺跡が、現代の日常空間たる建造環境と一体化している。

都市の上に建設された都市とでもいうべきユニークな性格を有するタラゴナも、20世紀後半には、他の多くの地中海都市と同様、物理的・社会的衰退の過程を経験した。とくに、郊外中心の開発が進められたフランコ体制期（1939～1975年）の歴史地区では、家屋老朽化とともに居住人口の減少・高齢化が著しく進んだ。1986年時点で5,103人だった居住人口は、2008年には4,181人まで減少している。

1970年代末、スペインの民主化とともに自治州設置による分権化が達成されると、都市政治の場にも大きな変化が現れる。タラゴナでは、民主化された市政による新しい都市計画の策定と自治州主導の遺産保護政策という大きく2つの軸に沿って、歴史地区再生に向けた都市政策が展開した。しかし、両者の間には、矛盾・対立する点が少なくない。

カタルーニャ自治州の都市計画制度は、自治州が策定する広域的な地域計画の枠内で基礎自治体が詳細な都市計画マスタープランを作成し、さらに必要に応じて特定地区に対する特別計画等で補完することを基本としている。タラゴナの場合には、歴史地区たる上手地区の特殊性ゆえに、マスタープランの対象から上手地区を事実上外し、特別計画を策定してきた。上手地区のために用意されたのが、1990年に最終承認を受けた上手地区特別計画（PEPA）である。PEPAの内容は、特定の歴史的建造物の修復を謳いつつ、地区の衛生条件や住宅環境の向上に重きをおくものだった。そうした目的を達成するためにPEPAが提案したのは、稠密化した歴史地区の建築密度を減築によって引き下げ、風通しや日照を改善することである。スペインの都市計画学では、居住環境改善をねらったこの種の減築を「多孔質化」とよぶ。

PEPAが取壊しによる減築を指示したのは、主として、納屋、作業場、小工場などの低層建造物であり、それらの除去は、広場な

どの公共空間の拡大に寄与するものとされた。これらの施策を通じて、既存のファサード線は著しい改変を受け、多くの街区の景観が一変するものと考えられた。

ところが、多孔質化を追求するPEPAは、上手地区の歴史的街並みの保全に力点をおく遺産保護政策との間で、早晩矛盾を生むことになる。タラゴナを初めて広範な遺産保護の対象としたのは、フランコ体制下の1966年に国が定めた政令である。同政令は、市域全体を考古学ゾーンとし、さらに上手地区を歴史的建造物群に指定した。その後の分権化を経て、文化行政に関する権限を獲得したカタルーニャ自治州は、1993年にカタルーニャ文化遺産法を制定する。以来今日にいたるまで、自治州内における遺産保護政策の基本的枠組みは、同法によって定められている。

こうした制度的枠組みのもと、国指定文化財の考古学ゾーンにあたるタラゴナでは、原則的にすべての建物の新築・改築等が自治州文化省の許可を必要とする。とくに、考古遺跡の存在が予想される場所で地下工事を行う場合は、施工に先立って、事業主の負担で発掘調査を行わなければならない。文化省は、発掘調査の結果をふまえて、遺跡保存の必要性の有無や保存の方法について決定を下す。上記に加え、歴史的建造物群に指定されている上手地区の場合には、土地区画の現状保持とファサードの維持をはじめ、建築行為にさいする景観保全上の配慮が強く求められる。さらに、個別に国または市の指定文化財になっている建造物に対しては、多項目にわたる厳しい保全基準が適用される。

以上のように、PEPAが多孔質化による衛生環境の改善を眼目としたのに対して、遺産保護政策は、都市の形成過程を体現する歴史地区の建造環境を重視し、一体的な保護を求めた。両者の矛盾が露呈されるなかで、最終的に制度的な優越が確認されたのは、市の都市計画ではなく、自治州が推進する遺産保護政策の方だった。結果として、PEPAの施行には、遺産保護の観点から強いブレーキがかかることになる。こうした事実は、抜本的な分権化を経験した後のスペインにあっても、多くの行政領域にまたがる横断的性格をもつ都市計画が、個別領域に関する縦割り型の政策から強い縛りを受けていることを示す。

しかしながら、実態分析をさらに進めると、遺産保護政策は、PEPAと同等かそれ以上に地区の変化に深くかかわってきたことが判明する。建造物の中に埋もれていた古代・中世の遺構が掘り起こされ、市民の視線を浴びるようになったこと、一握りの考古遺跡が博物館化されただけでなく、オープンスペースをなす広場・街路や公共施設でも遺産の可視化と都市景観への統合が進められたこと、飲食店や小売店はもとより一般の住宅でも、内

部に残された遺産が重要なデザイン要素とされたことなどが、具体的な証左である。

遺産保護政策がポジティブな効果を生み出した理由としては、さまざまな時代に起源をもつ建造物を柔軟に保存対象とすることで、特定の単体物件を超えて、都市空間に広範なインパクトを与えたという事実を指摘することができる。また、遺産保存・活用の担い手が行政に限定されることなく、広範な事業者・居住者を巻き込む方向へ展開してきたことも注目される。建造物の内部に埋もれた遺産の魅力を引き出すには、所有者自らがその価値に気づき、行動を起こすことが不可欠である。カタルーニャ建築協会タラゴナ支部の建物は、都市の共有財産たる遺産の継承に使命感をもって取り組んだ民間団体による、動態保存の好例である。一般事業者でも、豊富な遺産の存在に上手地区ならではの利点を見出し、遺産の保存と日常の空間利用を両立させている事例は非常に多い。

タラゴナ歴史地区における遺産保護の実践を貫くのは、遺産を化石のように固定化された過去ではなく、歴史的存在たる都市に内包された動的な存在としてとらえる考え方である。これは、環境や場所に働きかけた過去の人間の営みと現代を生きる人間が差し向ける眼差しが交わることで意味や価値を獲得する、一種の社会的構築物として遺産をとらえる近年の国際的な議論と方向性を共有する発想ではないか。しばしばヨーロッパ都市は、木材を多用する日本との比較において、石の文化を培ってきたといわれる。しかし、ヨーロッパの歴史地区でも、良質の石材をふんだんに使った堅牢・壮麗な建造物は一部のみで、他は木材の梁、煉瓦の壁、漆喰塗りなどを組み合わせた質素な建築であることが少なくない。構造的強度と保存状態、文化財指定の有無や保存のカテゴリなど、異質性に富んだモザイク状の建造環境をなす歴史地区において、各々の建造物の有効利用をはかるには、知名度の高い少数の遺跡やモニユメントの保存のみでは不十分である。立場を異にする多様な市民が歴史的遺産の保存・活用に関与することは、建造環境が内包するポテンシャルを余すことなく引き出すという意味でも、重要な条件といえる。

## (2) レウス

タラゴナと政治的なライバル関係にあるレウスを取り上げるさいに注目したのは、歴史地区を取り巻く地理的コンテキストに表れる両都市の対照性である。レウスの人口規模は10.7万人(2008年)であり、過去100年間は、タラゴナの方が上回る傾向にある。しかし、タラゴナ歴史地区が商業・ビジネス空間としての中心性を失ったのに対して、レウスでは、歴史地区が今日まで商業中心地と

しての地位を保っている。また、多数の郊外戸建住宅地が開発されたタラゴナとは異なり、レウスは、今日にいたるまで歴史地区を核とする市街地のまとまりを維持している。そうした対照性は、国指定管理港湾の存在を利用して石油化学コンビナートを誘致した県都タラゴナと、農産物加工品市場として繁栄した過去を継承する商業都市レウスという、各々を支える経済基盤の違いとも関係している。他方、遺産の性格からみると、市街地に面的に広がるタラゴナの考古遺跡に対して、レウスが有するのは、ムダルニズマ(近代主義)建築を中心とする建築遺産である。

調査を進める過程では、上述の地理的コンテキストのうえに成立した、先行形態というべきレウス歴史地区の共有像の存在が明らかになった。具体的には、①タラゴナ平野の起伏の少ない緩傾斜地に形成されたコンパクトな都市；②14世紀の囲郭都市に対する歴史地区としての位置づけ；③同心円と放射線が組み合わさった市街地拡大；④マルカダル広場で交わる軸線で4分された歴史地区；⑤18世紀の蒸留酒取引に端を発する「カタルーニャ第2の都市」たる商業都市レウスの繁栄；⑥富裕商人が建てたムダルニズマ(近代主義)建築に象徴される華のある商業空間、という大きく6点に整理される。

こうした先行形態の存在は、歴史地区に対する都市政策のモチーフを構成することで、各分野の施策による方向性の共有と連携を重視した実施体制の構築に貢献していると考えられる。

都市計画の領域では、マスタープランのもとで、歴史地区に対する都市改良特別計画が1987年に最終承認された。同計画は、歴史地区を構成する4区域を、衰退の程度によって北側2区域と南側2区域の大きく2つに分け、深刻な衰退状態にある南側2区域に対しては、思い切ったクリアランス型の再開発を進めた。とくに南東のアル・パリヨル地区では、商業床の上に住宅を積み、公道が内部を貫通する多機能混在型のショッピングエリアを実現した。

レウス歴史地区でクリアランス型再開発が可能だったことの大きな理由は、歴史的建造物群に包括指定されているタラゴナ歴史地区とは違って、レウスにおける従来の文化財指定が、個別の建造物や建築要素に限定されていた点にある。そうした条件を前提として、2005年に最終承認されたレウス建築・歴史芸術・自然遺産保護特別計画は、街並みにかかわる24のエリアを選定し、都市計画と連携して指定エリアの保護を進めるという方向を明確化した。遺産保護計画そのものも、市の都市計画局の立案によっている。都市計画と遺産保護政策を一つの政策パッケージとして位置づけ、クリアランス型再開発

と歴史的な建造環境の保全の両立を模索していることが、レウスの大きな特徴である。

他方、歴史地区における商業活性化は、商業都市としてのレウスのアイデンティティに直結する重要課題である。この領域に関する取組みは、行政・民間の相互補完性を大きな特徴とする。行政の側では、取壊しによって生まれたアル・バリョル地区の空地に、設計競技方式で先述のショッピングエリアを導入するという、都市計画からのアプローチを行った。市が設立したレウス観光・商業協会は、生きた歴史地区に集積する小規模店舗の魅力を、広報キャンペーンによって広くアピールしている。とくに、ガウディセンターの開設は、商業に奉仕する観光という、レウスの都市戦略にとって象徴的な存在である。民間事業者の側では、スペインでもっとも初期に結成された商業者組合であるレウス商業者同盟が、商業都市のプロモーターを自任する強い結束力を維持している。

### (3) 地区プログラム

マルカダル広場を起点とする 4 つのセクターを顕在化させる都市計画、地中海都市の多機能混在空間の現代的解釈、富裕層が残したムダルニズマ建築の街並みへの統合など、レウス歴史地区をめぐる都市政策の展開は、現代都市においても、知覚された先行形態が時を超えて都市の形象を結ぶ可能性を強く示唆する。古代遺跡の上にたつタラゴナのように、見る者を圧倒する視覚的構成をもたない大多数の都市にあっては、歴史地区の環境価値を発見し、鍛えつづけることが、都市の共有像を育むうえで不可欠ではないか。

歴史地区の環境価値は、遺産の保存・活用を通じて磨かれるのみならず、地区を使いこなす市民の活動によって日々新鮮味を保っている。したがって、地中海都市がもつ求心力をとらえるには、公共空間としての歴史地区のなりたちをふまえて、居住者・事業者を含む多様な主体による空間利用とそれを可能にしている主体間の連携・調整のあり方を注視する必要がある。ここに、公共空間の協育というべき新たな研究領域の重要性が浮かび上がる。

上述のテーマへの本格的な取組みは、平成 24 年度に始まる新規研究課題に委ねるが、本研究の枠内においても、カタルーニャ自治州の「地区プログラム」政策に焦点を当てて、今後の研究の出発点となる考察を行った。中心対象としたのは、同政策のもとで 2007 年次に始まったタラゴナ歴史地区の地区プログラムである。

地区プログラムの大きな特徴は、たんなる物理的な空間整備ではなく、女性・高齢者への支援活動、居住者間の日常的紛争の仲裁、アーティスト活動の活性化など、生活と密着

した広いソフト領域をカバーしているところにある。これは、まさしく上手地区を対象とする都市計画である PEPA に欠けていた視点にほかならない。

地区プログラムは、自治州と基礎自治体の協働による都市政策の遂行という事業手法確立の面でも、野心的な試みを行っている。カタルーニャ自治州は、市政に積極的に働きかけることで、衰退地区の生活空間としての再生をめざす都市政策を共有しようと努め、小規模自治体によるその種の政策遂行を地区基金の配分によってサポートした。さらに、地区プロジェクトの限られた予算を自治州の分野別政策で補完する工夫は、プロジェクトの実施現場たる地区を媒介として、自治州と都市の縦の関係に行政分野の間を繋ぐ横糸を架ける意味をもつ。

地中海都市は、自治体合併の圧力を頑なに拒否する強いローカル・アイデンティティを支えに、歴史地区を核とする求心力を維持してきた。その一方で、山間や海岸を侵食して進む不動産開発が象徴するように、都市のセグリゲーションを生み出す社会・経済の動きは広域化の一途を辿っている。だから、衰退地区再生の試みは、現場を熟知した市政を主役としつつも、それを取り巻く都市圏やリージョナルな主体との連携によってしか実効性をもちえない。地区プログラムの着想には、都市政策と地域政策の新たな関係構築にかかわる一種の政策思想が存在するのである。

以上の研究成果は、地中海都市というフィールドをいかしつつ、歴史地区を取り巻く地理的コンテクストの抽出から、共有像の再生産を通じた都市の求心力維持へ繋げる筋道を展望したという意味で、地理学のみならず、都市再生に関心を有する研究者・実践者に対して、広く貢献するものと考えられる。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

- ① 竹中克行「地中海都市の衰退地区再生—スペイン・カタルーニャの『地区プログラム』が推進するパートナーシップの都市政策」小林浩二・大関泰宏編『拡大 EU とニューリージョン』原書房、2012、133-144 頁。
- ② TAKENAKA Katsuyuki “Recuperación del núcleo histórico de Reus como espacio de centralidad”. *Mediterranean World*, XXI. 2012, pp. 89-112.
- ③ 竹中克行「イタリア・カリアリの都市空間にみる広場文化の創出」『共生の文化研究』6、2012、179-198 頁。

- ④ 竹中克行「建造環境に埋め込まれた遺産の保護・活用をめぐる問題—タラゴナ（スペイン）上手地区の再生」『都市地理学』査読有, Vol. 6, 2011, 19-34 頁.
- ⑤ 竹中克行「地域主義と民族集団」加賀美雅弘編『EU（世界地誌シリーズ 3）』朝倉書店, 2011, 77-91 頁.
- ⑥ TAKENAKA Katsuyuki “Entre la remodelación y la conservación: Hacia una renovación integral del centro histórico de Tarragona”. *Mediterranean World*, XX. 2010, pp. 111-132.
- ⑦ 竹中克行「生態社会環境としての都市の水辺空間—名古屋・中川運河の再生に向けて」『共生の文化研究』4, 2010, 100-119 頁.
- ⑧ 竹中克行「産地の制度的認定が促すスペインワイン産業の質的転換—生産者の事業展開にみる地理的呼称制度の二面性」『経済地理学年報』査読有, Vol. 55-1, 2009, 65-83 頁.

〔学会発表〕（計 13 件）

- ① 竹中克行「レウス（スペイン）歴史地区の中心性回復—商業都市としての先行形態の発展的継承」人文地理学会, 2012 年 11 月 18 日, 立命館大学.
- ② TAKENAKA Katsuyuki “Recuperación de la montaña japonesa a través del río”, 学術講演会, 2012 年 3 月 8 日, サンティアゴ・デ・コンポステラ大学（スペイン）.
- ③ 竹中克行「地理的視点から考える都市水辺空間の可能性—名古屋・中川運河の再生運動に寄せて」県立 2 大学教員研究交流会, 2012 年 2 月 14 日, 愛知県立大学.
- ④ 竹中克行「遺産政策における歴史的環境のマネジメント—タラゴナ（スペイン）の文化財に関する建築許可申請に注目して」人文地理学会, 2011 年 11 月 13 日, 立教大学.
- ⑤ 竹中克行「中川運河—現在を生んだ空間, 未来を紡ぐ場所」中川運河チャンネルアート Project No.One 基調講演, 2011 年 10 月 9 日, 岡谷鋼機第三倉庫.
- ⑥ TAKENAKA Katsuyuki “Vivir la montaña japonesa: Bosque, agua, kami”, 学術講演会, 2011 年 9 月 20 日, ルビラ・イ・ビルジリ大学（スペイン）.
- ⑦ 竹中克行「パートナーシップによる地中海都市・衰退地区の再生」京都大学地域研究統合情報センター共同研究「ヨーロッパにおける複合的国家の歴史的展開と現状比較」2011 年 6 月 25 日, 早稲田大学.
- ⑧ TAKENAKA Katsuyuki “Estandarització del japonès: Entre la recerca d'un patró comú i l'apropament de la llengua escrita a la

- parlada”, Simposio “Lo Standard Linguistic: Esperienze e Processi”, 2011 年 4 月 15 日, カリアリ大学（イタリア）.
- ⑨ 竹中克行「都市空間に可視化される遺産—タラゴナ（スペイン）歴史地区の遺産保護をめぐる考察」人文地理学会, 2010 年 11 月 21 日, 奈良教育大学.
- ⑩ TAKENAKA Katsuyuki “Seguridad, movilidad, banalidad: Tres conceptos clave para conocer Japón”, 学術講演会, 2010 年 9 月 16 日, ルビラ・イ・ビルジリ大学（スペイン）.
- ⑪ TAKENAKA Katsuyuki “Recovering the past in urbanscape: Historic center of Tarragona, Spain”, 一橋大学地中海研究会国際ワークショップ, 2010 年 9 月 2 日, トリエステ（イタリア）.
- ⑫ 竹中克行「分権化後のスペイン都市における歴史地区の再生—カタルーニャ自治州のタラゴナとレウス」人文地理学会都市圏研究部会, 2009 年 11 月 7 日, 名古屋大学.
- ⑬ 竹中克行「顕在化される歴史地区の環境価値—カタルーニャ自治州のタラゴナとレウス」一橋大学地中海研究会, 2009 年 11 月 8 日, 一橋大学.

〔図書〕（計 3 件）

- ① 竹中克行・齊藤由香, ナカニシヤ出版『スペインワイン産業の地域資源論—地理的呼称制度はワインづくりの場をいかに変えたか』2010, 330 頁.
- ② 竹中克行ほか編（1 番目）, 朝倉書店『朝倉世界地理講座—大地と人間の物語—7.地中海ヨーロッパ』2010, 490 頁.
- ③ 竹中克行ほか編（1 番目）, ミネルヴァ書房『人文地理学』2009, 302 頁.

〔その他〕

<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/person/takenaka/index.html>

## 6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
竹中 克行 (TAKENAKA KATSUYUKI)  
愛知県立大学・外国語学部・教授  
研究者番号：90305508
- (2) 研究分担者  
なし
- (3) 連携研究者  
なし